

研究ノート

『「リビア」という国をラジオで追う』

第4回 クロノロジー ～2011年の政権崩壊と放送②～

坂上 裕規

『「リビア」という国をラジオで追う』

最終回の第4回は、2011年のアラブ諸国政変の波とカッザーフィー政権崩壊までの、およそ9か月にわたるラジオモニタリングの記録のうち、3月末からカッザーフィー政権崩壊までの流れをクロノロジー形式で紹介する。

【3月28日（月曜日）】

アル・ジャジーラなど海外のメディアが、カッザーフィーの拠点都市であるスルト（シルテ）がついに反政府勢力によって制圧されたとの情報を流している。日本のメディアも最終的な確認はできていないとの注をつけた上で、この情報を引用した。

しかし、日本時間0時30分（日付が変わって29日）現在、972kHzはLJBC（スルト）の番組を継続している。23時50分から0時18分ごろまで一時的に電波が落ちたようだが、また復活して放送が続いている。現時点では反政府勢力が完全にスルトの町を制圧したわけではないようだ。放送で流れるメッセージの中には「私は、まだここにいる！リビアは今危機に瀕している！」と興奮気味に男性アナが話しているものもあり、今までとは違った切迫感が伝わってくる。

この927kHzはこれまで局名告知アナウンス（ID）をまったく出さなかったのだが、今日は女性の声でIDが時々出るようになっている。しかも、なんと「ラジオ・ベンガジ=Idha'at Benghazi」のIDが出ているではないか。もちろん、ベンガジからは現在反政府勢力による「自由リビアの声」が放送されているので、この局名は虚偽である。

きのうのニュースではスルトについては反政府勢力が制圧したかのような情報が流れていたが、今朝の各社のニュースでは反政府勢力側はスルトの東100キロほどの地点でカッザーフィー派の反撃にあって一進一退の状況にあることが伝えられている。スルトが緊張感に包まれていることは確かだが、今の状況ではまだしばらくかかりそうな気配だ。

リビアの放送で流れる歌について、閑話休題。このところ、反政府側の放送で流れる歌に少し変化が現れてきている。リビアの反政府勢力がアル・ベイダやベンガジを陥

落させて、旧カッザーフィー派のラジオ局から「自由リビアの声」を放送し始めたころに極めて頻繁に流れていた「祖国よ汝の名を残せ」を耳にする機会がめっきり減ってしまった。その代わりに「この地は我らの誇り」という愛国歌が要所要所で聞かれるようになっていく。特に 1449kHz の「自由リビア放送」で流れる確率がとても高いのが特徴。

「祖国よ…」がもともとパレスチナの抵抗歌であるのに比べて、「…我らの誇り」はリビアの名歌手故ムハンマド・セドキー (Mohamed Sedqi) が歌った楽曲であることから、リビア人に訴えかけるメッセージ性ははるかに強力であると思われる。

【3月30日(水曜日)】

朝のモニタリングでは国営の LJBC ラジオのトリポリ局 (1251、1053kHz) は確認できなかった。電波が出ていれば弱くても何とか聞けるはずなのだが、どうも停波しているような感じだ。スルトから Radio Benghazi の名称を使って放送している 792kHz のほうは、今日は電波がかなり強力だ。録音された番組 (メッセージや歌) が繰り返し出ている。反政府側がスルトに迫ろうとしたところ、精鋭部隊の反撃を受けて一旦退却したとの情報が一部で伝えられたが、それを裏付ける形だ。スルトはなかなか堅固な守りだと推測できる。

反政府側のラジオ放送はベンガジ、アル・ベイダ、アル・アッサの 3 局ともに放送を行っていることが確認できた。反政府側は「暴君による圧政を終わらせるために団結してトリポリを目指せ!」といったメッセージ放送を相変わらず放送しているが、これといって新味はない。あえて言うと「中だるみ」といった感じか。各地からの電話によるレポートも以前ほど頻繁には放送されなくなっている。

国営テレビのニュースは、本当に内容のないくだらないものばかりだ。だいたいニュースというものは、核となるストーリーが必要なわけだが、こここのところ LJBC TV のニュースは「各地でますます多くの人々がカッザーフィーを支持するために集まっている」がいつもトップ項目で出ている。以前は最低限どこの町の様子かをテロップで表示していたものだが、今日の放送ではほとんどそのような表示も出ず、映像の真偽のほどが怪しい。当然、いつの時点での映像かを裏付けるような場面も含まれておらず、後付け映像であることは否めない。

国営 LJBC のインターネットサイトは、今朝日本時間 08 時ごろを最後に繋がらなくなっている。それまでは一応ニュースも最新のものにアップデートされていた。

LJBC の放送が短波のオフバンド周波数、8500kHz でも出ているとの情報が海外の短波放送ファンのクラブ誌 DXLD などに紹介されている。情報に基づいてリモートレシーバー経由で受信チェックをしたところ、日本時間 22 時ごろに弱い信号が受信できた。番組は 972kHz のスルト局と平行になっていて、「ラジオ・ベンガジ」の局名告知アナウンスが時折出ている。自宅のラジオでも確認してみたが、日本での受信はで

きなかった。地中海地域においてすら信号が弱いので、日本で受信できないのも無理はないことだ。

【3月31日（木曜日）】

今朝の定時チェックでは、国営 LJBC は 972kHz（スルト）だけが確認できた。信号がきのうに続いてとても強くなっている。電力供給が改善されたのかもしれない。番組は相変わらず「ラジオ・ベンガジ」の ID を出していて、ベンガジの人々に向けたメッセージや音楽など、これまで数日間続いてきた番組と同じ内容が繰り返されている。ニュースは放送されていない。放送スタジオでの制作機能は限定的になっているものの、電波を出す機能は温存されているという状況のようだ。

日本時間 22 時ごろにチェックしたところ、短波 8500kHz でも 972kHz と同じ内容の放送が出ていることが確認できた。

一方、首都トリポリに送信所がある 1053kHz と 1251kHz はきのうから電波が確認できないままである。

反政府側の「自由リビア」は、675kHz のベンガジ、1125kHz のアル・ベイダ、1449kHz のアル・アッサの 3 局が確認できた。

1449kHz は相変わらず録音されたメッセージやサウンドクリップを多用している。31 日の 11 時ごろからはまた Takbir (Allahu 'Akbar Allahu 'Akbar Allahu 'Akbar, La ilah illa-Allah) を延々と繰り返していた。この 1449kHz は時々電波を止めているようで、放送開始や終了時間はかなり変動しているようだ。

国営テレビの衛星チャンネルは、ニュースの時間が不定期になり、ニュースのコメントの長さも短くなっている。映像をコメントなしで長々と流したりもしている。昨夜から今朝にかけてもっとも気になったのは、放送中に流れる歌の中に、国歌である Allah 'Akbar のビデオクリップが頻繁に含まれるようになってきていることだ。きのうの放送あたりから頻繁に、それも一時間のうちに 3 度も流れることがあるぐらい頻繁に放送されるようになってきている。

今般の一連の中東地域での政変劇において、政権が終末期を迎えると、国営のテレビやラジオの放送に国歌、国旗が頻出するようになってきている。エジプトやチュニジアばかり。イエメンも同様の状況を迎えている。リビアもまさにこうした状況を迎えていると言えよう。国旗や国歌で愛国心を鼓舞し、引き締めをはかろうということなのだろうが、もう時すでに遅しという感じだ。平時でも国旗や国歌を過度に前面に出さなければ国としての体を保てないという体制は、そもそも脆弱なのだといえる。

なお、LJBC のインターネットサイト、海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のインターネットサイトはともに接続不能の状態が続いている。

【4月1日（金曜日）】

国営ラジオのトリポリ局の二つの周波数が復活しているところが確認できた。朝の定時チェックでは 1251kHz で海外向けの大ジャマヒリーヤからのアフリカの声。また 1053kHz では LJBC TV の音声のサイマル放送が出ているところが確認できた (LJBC SatelliteTV と聞き比べて確認)。ラジオを聞いているだけでも、アナウンサーが「視聴者の皆さん」と呼びかけるところが何度も聞けるので、テレビと同時だということがわかる。LJBC スルトの 972kHz も相変わらず録音されたメッセージを繰り返し放送している。

今朝のチェックでは国営ラジオの 3 つの周波数は、これまでに比べるといずれも信号が強く、特に 972kHz は同じ周波数に出ている放送を抑えてこれまでにないほどクリアに聞くことができる状態である。1 時間程度のモニタリングだったが、ここ数日まったく同じメッセージがループで放送されていることが確認できた。番組はすでに録音されたものを流しているということだろう。

今朝からは、二日間にわたってダウンしていた LJBC のインターネットサイトも復活。そこを通して提供されているテレビのライブストリーミングも復活し、殆ど落ちることなく視聴できるようになっている。

一方、反政府派の放送は相変わらず 3 つの周波数が確認できている。

カッターフィー派が再び東部の町への攻勢を強めていて、アジュダビヤに迫る勢いだとのニュースが伝えられる中、国営メディアの体制立て直しが進んでいるとしても不思議ではない。

【4月2日（土曜日）】

昨今の国際情勢を反映して、カッターフィーの演説を茶化したラップが YouTube 上などにたくさん登場している。中でも 2 月 22 日にカダフィが国民に向けて行った有名な演説の「我々はリビアの家という家！ 通りという通り！ 小路という小路！ 一人一人！ すべてを掃除（註：反抗する者を根絶やしにすること）するのだ！...前へ！前へ！ 革命！革命！」という一節を使った「カダフィの歌 Zanga Zanga!」というラップは、YouTube 上で公開されていて多くのアクセスがある。アーティストは DJ カッターフィー…。一説によると、イスラエル人によって制作されたらしい。

これまでも、イラクのサッダーム・フセイン元大統領や、フセイン政権のもとで情報相をつとめたムハンマド・サイード・アル・サハフ（サハフ情報相）など、演説の内容やスタイルが特徴的な独裁者や独裁政権関係者の演説やスピーチをモチーフにしたパロディー楽曲が数多く作られている。

【4月7日（木曜日）】

1449kHz の反政府系放送は、「…緊急時にはこの『ラジオ自由リビア』にダイヤルを合わせてください…」との呼びかけを繰り返していた。これまで 1449kHz は局名が

「ミスラータの自由リビア放送」→「自由リビア放送」→「ラジオ自由リビア」などと変化してきている。

こうした状況から 1449kHz はミスラータ市内から放送しているのではなく、緊急時にミスラータを含むリビア西部地域に必要な情報を届ける役割を担っていることが明らかになってきた。今後、多国籍軍による首都トリポリ攻撃（少なくとも放送施設への空爆）が行われた際に電力供給施設が標的になると思われる。その際には、トリポリ発のラジオ放送は放送を停止するだろう。そうしてマウスピースを失ったカッザーフィー政権に代わって、このアル・アッサからの 1449kHz がリビアを代表する「自由リビア」の声となることが予想される。

1449kHz で時折延々と流される「唱明」にも何らかに合図が含まれているのかも知れない。さまざまな録音やサウンドクリップなどは、リビア国内ではなく海外のスタジオで制作され、密かにアル・アッサの送信所に持ち込まれた可能性が高いのではないかと考える。時折流れるサウンドクリップの完成度からは、そうした匂いが強く感じられる。音声素材がどこで制作されたかについては、残念ながらまだこれといった確証はないが、時にリビアの名歌手の愛国歌を流し、また時にはエジプトの大歌手である故ムハンマド・アブドゥルワッハーブの愛国歌を流す 1449kHz の「自由リビア」。放送が始まった当時に盛んに流れていた「この地は我らが誇り」という愛国歌はこのところ聞かれていない。そんな状況をチェックしていると、複数の国がこのメディア戦略にかかわっているような印象がますます強まってくる。

【4月11日（月曜日）】

今朝の定時チェックでもリビアの放送はそれぞれの周波数で放送を継続しているところが確認できている。さまざまなメディアが伝えているように、カッザーフィー派の反撃が続いていて中部から東部の都市を奪還する勢いのようなようだ。アジュダビヤまでカッザーフィー派の軍隊が進撃しているらしい。

トリポリから送信されている 1251kHz の海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声はアラビア語の通常番組を放送中。定時ニュースの中で、外国からの攻撃を非難する声明を繰り返して流している。一方 1053kHz では8時30分ごろに短いニュースが流れたあと、9時まではカッザーフィーを賛美する歌が次々と流れ、その後国歌でもある Allah Akbar を放送。そして مشوار الصباح 「Mishwar Al-Sabah」（直訳：朝の旅）という、モーニングショーのような番組を放送している。1053kHz はこのところずっと LJBC TV の音声のサイマル（垂れ流し）だった周波数だが、ラジオ独自番組が放送されている。音質も一時は割れてひどい音だったが、今日の放送はクリアな音質に戻っている。1251kHz のほうは変調が浅めで聞きづらい。

反政府側の 1449kHz (アル・アッサ) はノンストップのコーラン朗誦を流している。ベンガジの 675kHz とベイダの 1125kHz も確認できた。

LJBC のインターネットサイトは現在も接続可能で、テレビチャンネルのストリーミングも比較的快調に接続できている。

【4月13日（水曜日）】

国営 LJBC の 1251kHz と 1053kHz も電波がいつもよりも強めで、クリアに受信できた。1053kHz は LJBC の通常の ID *Idha'atu-l-Jamahiriyati-l-'Uzma* اذاعة الجماهيرية العظمى をアナウンスしている。通常編成での放送である。相変わらず毎正時には Allah Akbar が流れる。1251kHz については海外向け番組「大ジャマヒリーヤからのアフリカの声」が通常通り出ている。

一方、反政府側の放送の中で、675kHz はここ数日電波が弱めに推移している。

アル・アッサの 1449kHz はコーランの朗唱を延々と流すことが増えている。トーク番組（宗教関係者の対談が多い）が突然終了して、そのあと 20 分近くにわたる Takbir が続いたかと思うと ID が出て、さらにまたコーラン朗唱となるといった感じの荒っぽい構成は相変わらずである。そして、突如として番組が放送されることもある。最近放送されるようになったものに、カッザーフィー派の軍人で反政府派に寝返った（逃亡を成功させた）とされる人びとからのメッセージがある。ミスラータやアル・ベイダなどに派遣された部隊に属していた軍人たちだと紹介されている（もちろん真偽のほどはわからないが）。どの声も覇気がなく、インタビューの中には横で誰かが「こう話しなさい」と指示を出して、それをそのままオウム返して話している例も少なくなさそう。もしこれがいわゆる「やらせ」だとしてもなかなか憎い演出だと思える。

国営 LJBC のインターネットサイトは、今朝の時点でまたもや接続不能状態に陥っている。テレビチャンネルのライブストリーミングも接続できない。不安定な状態が続いていることは間違いない。

衛星の LJBC TV チャンネルは現地時間の深夜にもかかわらず「生放送」のテロップを出しながら、対談番組を放送している。LJBC TV のほうも、毎正時には Allahu 'Akbar（国歌）のビデオクリップが流れている。

【4月14日（木曜日）】

今朝の定時チェックでは、リビア国営 LJBC のインターネットサイトは引き続き接続可能で情報の更新も行われていたが、日本時間の午後になってサイトへのアクセスができなくなった。日本時間 15 時の時点でまた復活した。内容もアップデートされている。ただし、その後つながったり落ちたりという感じで、安定していない。

ところで、反政府側の放送を流しているアル・アッサの「自由リビア放送」(1449kHz) の様子がきのうあたりから変だ。日本時間のきのうの朝の時点では延々とノンストップのコーラン朗誦を流していたのだが、音質が極めて悪く（変調が浅く）内容がよく聞き取れない状況だった。今朝の定時チェックの時点では電波が出ていることは確認できた

が、肝心の音が何も乗っていない状況がずっと続いている。リモート受信によると（ギリシャの受信機を利用）1449kHzの無変調キャリアの後ろでイタリア語（イタリアのRAI）が聞こえていた。しばらくして、14時35分に突然音声が発旧するところが確認できた。何事もなかったかのように放送が再開した。ミスラータの住民に向けたメッセージとインタビューが放送され、局名告知アナウンスも通常どおり「自由リビア放送 自由と威厳の声=Idha'at Libya al-Hurrah, Sawtu-l-Hurriyati wa-l-Karamah」が出ている。

国営のLJBCはトリポリの2波とスルトの1波がすべて確認できている。スルトの972kHzは録音されたメッセージを相変わらず垂れ流していて、次に何が放送されて、話し手が何を言うのかまで覚えてしまうほどだ。引き続きIDがごく稀にIdha'at Benghazi（ベンガジ放送）と出ている。もちろんこれは「ニセモノのベンガジ放送」である。スルトの972kHzは平時にはトリポリからのメインプログラム（アラビア語）を中継していたのだが、非常体制になって以来トリポリとは完全に分離されて録音された別編成の番組を垂れ流すだけになっている。

23時現在、国営ラジオの短波8500kHzも放送を行っているところが確認できた。カッターフィー側の放送で972kHz（スルト）とパラレルになっている。

【4月15日（金曜日）】

日本時間0時5分過ぎにリビア国営LJBC TVがBreaking Newsとして首都トリポリの住宅地でカッターフィーの住居があるとされるBabu-l-Aziziyah地区が「植民地主義十字軍」の攻撃の対象となったと伝えた。

字幕ニュースはアラビア語だけでなく英語でも表示されていて、その中で「攻撃に使われたミサイルの経費はカタールとUAEの政府が負担している」と批判している。

日本時間0時（リビア時間16時）のニュースの時間は、完全に内容のないニュースが少しだけ流れたが、その後は古いニュース映像などをつなぎ合わせて「植民地主義十字軍」の攻撃がいかにか非人道的かを批判するビデオクリップが放送された。

また、もう一つのBreaking Newsとして「植民地主義十字軍による空爆さなかのトリポリ市内を車に乗って視察するカッターフィー」の映像が流れている。市街地をクラクションを鳴らしながら走り抜ける車のサンルーフのところから体を出してこぶしを振り上げるカッターフィー。「つい先ほど撮影された映像」だとのことだが、本当に今日の映像なのかどうか、よくわからない。

【4月16日（金曜日）】

朝の定時チェックの際に、1449kHzのアル・アッサが久しぶりに「ミスラータの自由リビア放送 = Idha'at Libya-l-Hurrah min Misratah」とのIDをアナウンスしていた。日本時間8時33分のことである。このところ1449kHzはIDはおろか、音質

も悪い状態が続いてきたが、きょうの放送は久しぶりに音の乗りも良く、信号もここ数日に比べると強めであった。局名告知アナウンスでミスラータから放送しているとは謳っているものの、放送の内容はミスラータのスタジオから行われているものではなく、これまでの内容の域を出ないものだと判断できた。しばらくするとまたコーランの朗唱が始まり、延々と続いた。1449kHzの役割については以前のこのページで予想を立てましたが、今しばらくは現在のような放送内容が続くものと思われる。

一方、ベンガジから出ている675kHzの「自由リビア」のほうは信号が弱く、放送が出ているのかそれとも終了してしまったのかが確認できないほどであった。この675kHzについては、オランダの国際放送局Radio Netherlandsのメディアブログが伝えるように、インターネット上でライブが聴けるようになった。局が直接実施しているのではなく、地中海周辺のどこかのポイントでエアチェックしたものをネットに流しているとのこと。そのため、伝播状態が変化する現地の夜間になると受信状態が悪くなる。このライブストリーミングでチェックしても、675kHzは確認できなかったのも、これまでずっと24時間放送を実施してきたベンガジ局は、放送時間を区切ったり減力放送を実施したりしているものと思われる。きのうの新聞にベンガジでは電力不足が深刻化していて、計画停電が実施されているとの記事が載っていたが、実際に放送にも影響が及んでいる可能性がある。

その他の周波数についてはカッターフィー側、反政府側ともに放送が継続されている。

【4月16日（土曜日）】

リビアの反政府勢力の放送で一時盛んに流れていた愛国歌「この地は我らの誇り」がしばらく聞かれなかったのが寂しく思っていたが、今朝の定時チェックの際に675kHzのベンガジで久しぶりにこの歌が流れた。

しかし、流れたのは新しいヴァージョン。もともと「この地は…」はリビアの大歌手（トリビア人は呼んでいる）として知られるムハンマド・セドキーが1960年代に歌った楽曲なのだが、最近になって新たなアレンジで別の歌手が歌っているヴァージョンがリリースされたもの。

新たなヴァージョンを歌っているのはヤヒヤ・ハッワーという歌手。声を聞く限り若い歌手のようだ。演奏はシンセサイザーによるもの。バックコーラスも原曲と同じように入っている。

しかし、歌の素晴らしさは原曲の足許にも及びない。ヤヒヤの歌は上手いとは言えない。演奏はポコポコというチープなデジタルビートで深みがない。メロディー、音階とリズムのとり方が原曲に忠実ではない… などなど。聴いているとなんか居心地が悪い。

過去の名曲をリバイバルさせるということが音楽界では少なくないが、よほどのことがない限りオリジナルを超える出来であることはまずない。このリビアの名曲「この地は我らの誇り」もそういった楽曲の一つだ。それにしても、今回のヤヒヤ・ハッワーに

よる「この地は…」の出来は、オリジナルへの冒とくだとすら思えてくる。

【4月18日（月曜日）】

海外のメディアが伝えるところによると、中西部の都市の中にはカッターフィー派の攻撃が続いているところが少なくないようだ。比較的早い時点で陥落するかと思われた中部の町スルトも NATO 軍による空爆にもかかわらずまだ持ちこたえているようだ。当初各メディアがいまにも陥落するかのように伝えた首都トリポリも、現在なおカッターフィー派による堅固な守りを誇っているかのように見える。今日も朝の定時チェックでの受信では、これといった変化は見られなかった。

反政府側の放送は、675kHz、1125kHz、1449kHz とともに確認できた。1449kHz は相変わらずノンストップで延々とコーランの朗誦を流し続けていた。あまり代わり映えがしない。コーラン朗誦やタクビールの繰り返しは緊急時にいつでもラジオの送信を開始できるように（火おこしをできるように）、種火のような役目を果たしていると考えられるが、常にこのような放送を続けていると、いざというときに人々がこの周波数を聴かなくなるのではないかと心配でもある。

政府側の放送は、1251kHz、1053kHz、972kHz がいずれも確認できた。3つの周波数は一部時間を除いてそれぞれ別番組を流している。短波の8500kHzについては日本時間22時ごろから972kHzと平行の番組を流しているところが確認できている。

政府側の LJBC TV もここ数週間編成には変化は見られない。LJBC のインターネットサイトはきのうからまた接続できなくなっていたが、21時30分現在再び見ることができるようになっている。ただし、テレビのストリーミングは接続できない状態が続いている。

【4月20日（水曜日）】

フランスのサルコジ大統領がカッターフィー派への空爆を強化する方針を打ち出したが、一日や二日で情勢が変化するような局面ではないだろう。

ラジオ・テレビの勢力図にも変化はない。朝の定時チェックでは、反政府側の1449kHz（アル・アッサ）がとても安定していた。ただ、内容はコーラン朗誦をノンストップで流しているだけであった。コーランの詠み手は何人かのヴァージョンが使われていて、詠みの速さも異なる。

反政府側では675kHz（ベンガジの「自由リビア」）、1125kHz（アル・ベイダの「自由リビア」）が確認できたほか、カッターフィー側の1251kHz（海外向けの大ジャマヒリーヤからのアフリカの声）、972kHz（スルトの LJBC）、1053kHz（トリポリの LJBC）が相変わらずそれぞれの番組を流していた。

LJBC のインターネットサイトは機能していて、ニュースのアップデートも行われている。

【4月21日（木曜日）】

ベンガジの「自由リビア」をインターネットストリーミングで聴取できるようになったので、時間を気にせず内容をチェックすることができるようになった。じっくり聴いてみると、ベンガジの「自由リビアの声」はずいぶんイスラム色が強くなっているように感じられる。流れてくる歌の中には、2001年に崩壊したアフガニスタンのターリバーン政権の放送 Radio Voice of Shari'ah が流していたアカペラの歌を彷彿とさせるものもあって、解放当初の雰囲気や勢いが影をひそめてしまっている。聴取者やリポーターから寄せられる電話の生中継もめっきり減ってしまっている。ベンガジや周辺の都市の状況などが伝えられる機会が減っている。

番組の中で「詩」が占める割合が高くなっているのも特徴。今日の放送の中では、カッザーフィーに向けた詩が朗読されていた。背景には情緒的な BGM が流れていて、雰囲気作りを意識した構成となっている。

反政府派による衛星テレビ放送もいくつか始まったことから、ラジオ放送の役割が変わってきたということだろうか。つまり、安全情報やライフラインに関する情報などはテレビ放送に役割が移り、ベンガジのラジオはもっぱら精神面を強調しているかのようだ。アル・ベイダの「自由リビア放送」が依然として電話リポートを放送しているのとは対照的である。

きのうの夜 22 時 30 分ごろにチェックしたところでは、8500kHz で出ている国営 LJBC の放送は依然として 972kHz のスルト局と同じ内容を放送していた。相変わらず録音されたメッセージを繰り返して放送しているだけの内容である。

LJBC のインターネットサイトは今日も接続できている。

【4月25日（月曜日）】

西部の主要都市ミスラータが激しい戦闘の末反政府側に優勢な状況に変化したようだ。1449kHz のアル・アッサは時折「ミスラータの自由リビア放送」との ID を流している。しかしミスラータ市内の状況を詳細に伝えるのではなくて、ミスラータにゆかりがある反政府勢力関係者が番組に登場したりしている。番組がないときには相変わらずコーランの朗唱を延々と流したり、Takbir を延々と流したりしている。

今朝の定時チェックの際には、トリポリの 1251kHz と 1053kHz、スルトの 972kHz のカッザーフィー派の 3 つの周波数がいずれも確認できず、いよいよか…と思ったが、その後 1251kHz と 972kHz が確認できた。電波が一時的に止まっていたようだ。

972kHz のスルトは今もベンガジ向けのメッセージ放送を流していることが確認できた。メッセージの種類が少し増えた。基本は同じような呼びかけだ。放送の中で流れる歌に少し変化が見られる。これまではカッザーフィー礼賛の威勢の良い歌（ポコポコビートのリビア歌謡）が多かったのだが、今日の放送ではウッド（弦楽器）の伴奏によ

る静かな歌が流れていて、最初に聴いた時には政府系の放送ではないのではないかと思うほどだった。

国営 LJBC のインターネットサイトは現在のところ接続可能。衛星テレビチャンネル LJBC TV のほうも相変わらずの番組を流している。

【4月26日（火曜日）】

現地時間月曜日にカッターフィーの居宅があるとされるトリポリの Babu-I-Aziziyah 地区に対する空爆があって、LJBC TV は現地の模様だとする映像を盛んに放送している。Babu-I-Aziziyah 地区には LJBC TV のうち As-Shababiyah TV の施設があるとされている。

現在のところ国営 LJBC TV のメインチャンネルは通常通りの送信を継続している。また Al-Libiya TV もインターネットでのライブ配信が継続されている。しかし、As-Shababiyah はネットでの視聴ができていない。施設に被害があったかどうかはわかりませんが、今後このあたりの動きにも注目したい。

リビア国営のテレビチャンネルはそれぞれがトリポリ市内に施設を持っているものの、同一の建物の中にはなく、地域分散がなされている。リスク分散を目的として、ある地域が空爆を受けても別の地区から放送を継続できれば情報発信が続けられるという考えに基づいていると思われる。

ラジオ放送では、国営の LJBC は 1053kHz の国内向けと 1251kHz の大ジャマヒリーヤからのアフリカの声が継続して確認できているが、26日の8時過ぎの段階では 972kHz のスルトが確認できていない。25日の日本時間 2200 の時点では放送が行われていることが確認できていた。海外メディアからの情報によると、NATO 側はスルトを含む複数の都市の情報拠点を重点的に空爆したとのことで、気になるところだ。

なお、スルトの LJBC は独自の HP を持っていて、こちらのほうはまだ機能している。ライブストリーミングなどは行われていないのであまり役立つ情報ではない。情報（ニュース）の更新は止まっているようだ。

【5月19日（木曜日）】

アル・ジャジーラなど複数のメディアが、リビアの最高指導者カッターフィーの妻が隣国チュニジアのジェルバ島に逃れたと報じている。カッターフィーの側近の離反も再び起きているとのことで、そのような情報だけを見ているとカッターフィー政権の崩壊が近づいているとの印象だ。しかし、放送を通してリビア情勢を見ると、大勢に大きな変化は感じられない。

今朝（日本時間）のモニタリングでもリビアの国内放送の各周波数はこれまでと同様のラインナップで放送が出ていた。つまり：

★675kHz ベンガジの「自由リビアの声」

☆972kHz スルトの「ニセのラジオ・ベンガジ」=LJBC のベンガジ方面向け宣伝放送

☆1053kHz トリポリの国営ラジオ LJBC

★1125kHz アル・ベイダの「自由リビア放送」

☆1251kHz トリポリの国営ラジオ LJBC の海外向けチャンネル「アフリカの声」

★1449kHz アル・アッサの「自由リビア放送・ミスラータ」

☆8500kHz スルトの「ニセのラジオ・ベンガジ」=LJBC のベンガジ方面向け宣伝放送

☆) カッザーフィー派、★) 反政府派

ただ、1449kHz の「自由リビア放送」は、以前にも増して「ミスラータの」と地名を付けた ID を出す回数が増えている。以前にも書いた通り、この周波数はおそらくミスラータから出ているわけではなく、チュニジアとリビアの国境に近いアル・アッサという場所に送信機があると思われる。ミスラータはカッザーフィー政権、反政府勢力双方にとって戦略的要衝であるわけで、このミスラータからの放送であるとアナウンスすることは、ミスラータ以外の町に対して要衝が反政府勢力によって掌握されたことを印象付ける宣伝効果がある。

1449kHz はミスラータでの戦況に応じて「ミスラータの」という地名をアナウンスしたりしなかったりしているのではないかとも思われる。つまり、ミスラータでの戦況が反政府側に有利に働いているとアル・ジャジーラなどが伝えているときには、ID にも地名が頻繁に出てくるようだ。その反面、ミスラータの状況がカッザーフィー側に有利になっているときには、コーランの朗誦や Takbir を延々と流し続けるというふうに変化が現われているようだ。統計をとったわけではないので、確定的なことはいえないが、この放送を聴いているリビア国民は海外メディアが伝える戦況とこの放送の ID とをあわせ聴くことで、戦況が本当に反政府側の有利に推移しているのではないかと感じるようになるのではなかろうか。そういう意味で 1449kHz は、心理戦のツールとして機能しているのではないかと推測している。この見方にあてはめると、現在のミスラータは反政府勢力の勢力下に入ったと考えることができる。

一方、カッザーフィー政権にとってのもう一つの要衝都市「スルト」から放送されている 972kHz のほうは、相変わらず録音済みのメッセージを放送している。きのうの夜の時点では短波 8500kHz での送信も継続していて、972kHz と同じ内容が放送されていた。この 972kHz はスルトから電波が出ているものの、スルトの国営ラジオ LJBC のローカル FM 局の番組とは別番組が流れている。繰り返しになるが、972kHz はカッザーフィー政権の最前線から東部のベンガジに向けた「宣伝放送」の役割を担っている。しかし、ここ 2 カ月近く同じ内容を繰り返し垂れ流しているだけなので、この放送の効果はきわめて限定的なのだろうと推測する。たまに「ベンガジ放送です」との ID が出る。

このようにラジオ放送には劇的な変化はみられないが、テレビを見ていて気づいたことがある。

【5月19日（木曜日）】

日本時間午前0時前後にLJBC TVが流していたのは、これまで見たことがないような画面。緑のバックに白抜き文字で番組の名前とプロデューサーの名前などが書かれた静止画（ノルマル画面）が何と30分以上にわたって出っぱなしになっていた。音声は歌番組だったのだが、画面とまったくシンクロしていなかった。その後突然画面はいつも流れているリビアの愛国歌のビデオクリップ、正時には国歌のビデオクリップ、そしてニュースと続いた。その後は特に異常は見られず。

きのうの異常な30分の静止画の連続は、単なる機材の故障だったのか、あるいはテレビ局側の何らかのミスだったのか、それとも…？カッターフィー政権の中枢から離反者が出ているという報道がある中、気になる事象ではある。

LJBCのインターネットHPは健在だ。テレビのライブストリーミングも生きている。こちらはサーバーが海外にあると思われ、政権崩壊と直接連動はしないだろうと考えられるが、日本ではLJBC TV以外のリビアの衛星テレビチャンネルを視聴することができないので、ライブストリーミングが生きているということは重要である。

5月19日（木曜日）、日本時間23時過ぎにチェックをしたところ、衛星（ASIASAT）経由で送信されているリビアのテレビチャンネルが通常のLJBC TVではなく、Ash-Shababiyahに入れ替わっている。インターネットのライブストリーミングではLJBC TVの番組は引き続き視聴できている。LJBC TV自体は放送を継続しているもののASIASATへのアップリンクがAsh-Shababiyahに変わったようだ。

Ash-Shababiyahは、LJBC TVよりも愛国的で、より内容のない放送である。随所で「I love you oh Libya」だとか「われわれは決して屈服しない」といったスローガンが流れる。

念のためにASIASATの衛星チャンネルをスキャンしてリビアのチャンネルが増えたのかどうか調べてみたが、リビアのチャンネルは1つだけしか出ていない。LJBC TVがAsh-Shababiyahに替わった理由はわからない。

【5月20日（金曜日）】

朝の定時チェックでは国営の972kHz（スルト）は確認できなかったが、23時の時点では放送が行われているところが確認できた。相変わらず録音されたメッセージが繰り返されている。

一方、常に972kHzと同一番組を流してきた短波の8500kHzは別番組（LJBC TVの音声と思われる）をキャリアしているところが確認できた。23時ちょうどにリビア国歌>Allahu 'akbarが流れた。

衛星テレビ、ASIASAT のリビアチャンネルは、相変わらず Ash-Shababiyah をキャリアしている。

【5月23日（月曜日）】

朝の定時チェックでは 972kHz は番組を継続中。

1053kHz、1251kHz もともにそれぞれ通常番組を放送している。

1125kHz、675kHz もともにそれぞれの番組を放送している。

1449kHz はきのうから今日にかけて無変調のキャリア（電波は出ているが音声がない状態）を垂れ流していて、無音の時間帯が多くなっている。今朝のチェック時にも音声は出ていなかった。

テレビは、きのうの夜（日付が変わって日本時間で今日の午前 1 時ごろ）までは Ash-Shababiyah の番組をキャリアしてきたが、今朝チェックしたところ、右上に Ash-Shababiyah のロゴ、右下に LJBC TV のロゴが入った混合編成の番組を放送しているところを確認できた。テレビ画面は二分割で、右側に LJBC TV の対談番組、左側には Babu-l-Aziziyah（首都トリポリのカッザーフィーの居宅があるとされる広場の周辺）のライブ映像（と、国営テレビは言っている）を流している。現地深夜なのでこういう編成にしたのか、やはり LJBC TV 側の衛星アップリンクが不調なために、Ash-Shababiyah の施設を使って LJBC TV と混合編成としたのかは不明だが、いずれにしてもこうした混合編成はイラクやエジプトの有事の際に行われ、その後それぞれの政権は崩壊している。カッザーフィー政権崩壊の前兆なのだろうか。

なお、インターネットのストリーミングをチェックしたところ、LJBC TV は通常の番組を流している。それを衛星で放送する際に Ash-Shababiyah 側で LJBC TV をとりこみ、ロゴを付加した形で送信を行っている模様。

ちなみに、夜のチェック（23 時過ぎ）時点では Ash-Shababiyah 単独の放送となっていて、LJBC TV のロゴはつけられていなかった。時間帯によって、LJBC TV との相乗り編成が行われているようだ。

【6月6日（月曜日）】

基本的にはこれまでの流れに大きな変化はない。ただ、スルトから電波が出ている 972kHz が、ここにきてトリポリからの国営ラジオ LJBC 全中番組を時間帯によっては中継していて、独自の「プロパガンダメッセージ放送（ニセのラジオ・ベンガジ）」と切り替えながら放送を継続している。

一方、アル・アッサ発の 1449kHz については引き続き "Radio Free Libya from Misratah" との ID が出ているが、FM で放送されている Misratah の Free Libya（インターネットライブが聴取可能）とは別番組を放送している。両者の間の関係についてはかねてから不思議だったが、先日 Ustream で Free Libya FM Misratah の局長イン

タブューを視ていたら「新たに中波 1449kHz も放送のラインナップに加わって…」と 1449kHz の存在について言及していた。局長自身、1449kHz が Misratah からの放送であるとの認識を示したことが大変興味深いところだ。

【8月16日（火曜日）】

リビア国営テレビの Al-Libiyah Channel を Web ストリーミングで視聴していたら、画面下の字幕に衛星テレビの周波数の周知とともに、ラジオの周波数についての周知が出ていた。

それによると、衛星テレビチャンネルは「妨害」のために周波数を変更して（Nilesat の 11843MHz に）放送しているとのこと。また、「妨害によってテレビが視聴できない場合は、ラジオを聞くように」との案内が出ていた。案内の中では Misratah のローカル FM の周波数を案内していて 99.7MHz と表示されていた。これは、反政府側の Free Libya Misratah がアナウンスしている FM の周波数とは別である。こればかりは現地に行かないとどんな放送が出ているのかを確認する術がない。

このテレビ画面では、「リビア東部向け」の特別放送として中波 972kHz と短波 8500kHz が公式に案内されていた。これまで自分がモニタリングして受信してきた 972kHz と 8500kHz の放送内容が「宣伝放送」であるとたびたび書いてきたが、LJBC が公式にこれらの周波数での番組を「リビア東部向け」特別放送であると案内したことになる。

ラマダーンも後半に入ろうという今、依然として各地で戦闘が続いていて、ザーウィヤが反政府勢力側によって制圧されたとの情報が流れている。カッターフィー政権側は否定しているようだ。

【8月18日（木曜日）】

リビア関連のラジオ放送は、今朝の定時（午前 8 時）チェックでは以下の周波数が確認できた。

国営（カッターフィー政権側）LJBC 国内向け：1053kHz

国営（カッターフィー政権側）海外向け「アフリカの声」：1251kHz

反政府側 Radio Free Libya - Misratah：1449kHz

反政府側 Voice of Free Libya - Benghazi：675kHz

一方、LJBC が「リビア東部向け」として放送してきた 972kHz と 8500kHz は、チェックの時点では確認できなかった。972kHz は、普段は日本時間 9 時ごろに急に送信を終了することが多いが、今朝は電波が出ているかどうか確認できなかった。その後 23 時過ぎにチェックしたところ、8500kHz は電波が出ており、正時には国内向け LJBC と同時に国歌 Allah Akbar が流れているところが確認できた。短波による「リビア東部向け」の放送は継続されている。

ただ、LJBC のウェブサイト経由で視聴できていた LJBC TV と Al-Libiyah TV は、ここ数日配信が止まっている。海外からの情報ではカッザーフィー政権の崩壊が間近だとも言われている。「リビア東部向け」放送の 972kHz の停波や、テレビのライブストリーミングの停止が、何か関係しているのだろうか。もっとも、LJBC の各チャンネルについては、これまでも送信や配信が止まったり再開されたりを何度も繰り返してきているので、短期的な状況だけで包括的な情勢の変化だと結論付けることはできない。

ここにきてリビアのラジオ放送(カッザーフィー側)の内容に若干の変化が見られる。放送の中で流れる音楽を聴いていると、ラマダーン以前はカッザーフィーを礼賛し、帝国主義・十字軍の攻撃を激しく非難するような内容の歌(ポコポコというビートにのった速いテンポの楽曲)がひっきりなしに流れていたのだが、このところ聞かれる音楽(歌)は、オーソドックスなアラブ歌謡のスタイルが主流となっている。1950年代のアラブ歌謡スタイルの楽曲が多く聞かれる。この変化についても、ラマダーン月中だけの変化なのか、それともそもそも LJBC が方針転換をしたのか、9月以降の放送スタイルを分析してみないと何とも言えない。

【8月20日(土曜日)】

アル・ジャジーラや、リビア反政府派の Voice of Free Libya がリビア戦局の緊迫化を伝えている。反政府勢力がいよいよ首都トリポリへの進攻を本格化したという情報だ。

こうした情勢と連動しているのかどうか確認はとれていないが、ラジオ放送をめぐっては以下のような状況が生じている。以下、定時チェックによる結果である。

1. ラジオ放送

カッザーフィー派のラジオ周波数はいずれも確認できず。海外向け 1251kHz (大ジャマヒリーヤからのアフリカの声) はキャリアが出ているようにも思われるが、音声は何も出ていない。

反政府勢力側の放送は、「自由リビア」のベンガジ、ベイダ、そしてミスラータがそれぞれ確認できた。

2. ウェブサイト

国営 LJBC のウェブサイトは依然としてダウンしたまま。接続不能状態が続いている。LJBC のローカル局(スルト)のウェブサイトは、つながることはつながるが、フレームが表示されるのみで、これまで表示されていたカッザーフィーの写真や局のプロフィール文は見えなくなっている。海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のウェブサイトは接続可能。ただ、情報は8月18日以来更新されておらず、古いニュースが表示されている。音声のアーカイブも8月18日のニュースが残っている。ライブストリーミング音声の配信はもともとダウンしていたのだが、やはりダウンしたままである。

3. テレビ

LJBC のウェブサイト経由のテレビの視聴は不能。Asiasat 衛星の LJBC チャンネル

は通常通りの送信が行われている。

【8月21日（日曜日）】

今朝の定時チェックで、カッザーフィー派のLJBCのラジオ周波数のうち、トリポリ発の海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声の1251kHzが復活しているところが確認できた。

1251kHzは音声がやたらと小さいので聞きづらい状態だったが、IDは通常のもので出ていることが確認できた。毎時15分にニュースが放送され、日本時間の今朝ほど行われたカッザーフィーの電話演説が延々と流されていた。カッザーフィーの演説が30分近くに及ぶため、ニュース枠が40分間ほどに拡大されている。したがって、次のニュースまでの時間は20分程度と短く、音楽と「国の危機に際しての声明」が放送される、単純な編成となっていた。

トリポリ発の1053kHzや、スルト発の972kHz、それに短波8500kHzはいずれも確認できず。

一方、反政府側の1449kHz（自由リビア・ミスラータ）は、久しぶりにリビアの愛国歌「この地は我らが誇り」を繰り返し流している。それとともに、番組の切れ目にはたびたびTakbirの繰り返しを数分間ずつ流している。

自由リビアの1449kHzについては、ベンガジ、ベイダの自由リビア放送とは異なる役割を負っているということを書いてきた。つまり、ベンガジ、アル・ベイダの自由リビアは、それぞれの都市から放送を行っているのに対し、1449kHzはIDではミスラータを名乗っているが送信所はチュニジアとの国境に近いアル・アッサにあって、ミスラータのスタジオではないところから番組が送出されていることは明らかです。ミスラータには自由リビアのFM局があって、そこで流れている番組とは明らかに内容が異なっている。それは、1449kHzで流れている番組のほとんどすべてが生放送ではなく、録音された番組であることから推測できる。

1449kHzの役割は「ミスラータ」という要衝の名称を使って、首都トリポリに対して心理的圧力をかけることにあると考える。西側からの経済制裁と、カッザーフィー政権側による情報統制によって「情報過疎」に陥っている（であろう）トリポリの人々に対して、要衝ミスラータが反政府勢力の勢力下にある（かの如き）ことを印象付けることで、カッザーフィー体制に対して揺さぶりをかける役目を果たしているのだと思われる。

その1449kHzだが、これまで反政府側の旗色がよいときには頻繁に愛国歌「この地は我らが誇り」を流してきた。特に今年の3月ごろ、つまりリビアの東部が反政府勢力の勢力下に次々と入っていた頃には、この愛国歌がよく聞かれた。その後戦局が膠着化し、その状態が長引くにつれて、威勢のよい愛国歌は聞かれなくなり、宗教色がつよい番組が増えていった。ラマダーンに入ってからこうした状況が続いていた。

それが、戦局の変化が伝えられたきのうあたりから再び急に「この地は…」が繰り返して流されるようになってきた。しかも、今朝 11 時ごろの番組ではトリポリをめぐる戦況について触れて、首都トリポリへの攻撃が本格化していること、トリポリ市内の刑務所（政治犯収容所）を反政府勢力が襲撃し、カッザーフィー体制下で自由を奪われていた人々の多くを解放した…といった情報が流された。少なくとも、今日の放送は生放送だったようだ。

【8月22日（月曜日）】

日本時間 8 時の定時モニタリングでは、カッザーフィー側のラジオ各波は確認できなかった。きのうは聞こえていた海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声も今日は沈黙してしまっている。LJBC のウェブサイトは依然として接続不能だが、海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のサイトは更新されないまま放置されている。これはきのうと同じ状態。

一方、反政府勢力側の Voice of Free Libya は 1449kHz の Misratah が本格的に放送を行っている。生放送の時間が増えている。放送は祝賀ムードに満ちている。トリポリからの報道によると、反政府勢力はトリポリに続々と到着していて、カッザーフィー派の抵抗があるものの、首都の大半を制圧下に置いたとしている。ベンガジの Free Libya (675kHz) も、トリポリ解放を祝う内容の番組を放送している。

反政府側の放送はますます頻繁に愛国歌「この地は我等の誇り」を流している。この歌は、カッザーフィー側、反政府側ともにリビアの愛国歌としてきた楽曲だが、特に反政府側は今回の一連の動きの中で抵抗の象徴としてきた。この歌はもともと Mohamed Sedqi という、リビアが誇る名歌手（故人）が歌ったもので、反政府側はオリジナルヴァージョンを好んで流してきた。リビア人の知人にきいたところでは、この歌はリビアの人々にとって第二の国歌という位置づけにあるようだ。

今日の Voice of Free Libya, Misratah の放送では、「祖国よ汝の名を残せ」という別の愛国歌も聞かれた。これは、今回の一連の動きの中で、東部のベンガジとアル・ベイダから初めて「自由リビア放送」が電波を出した頃にきわめて頻繁に流れていた歌である。もともとはシリアの革命歌謡で、その後多くの歌手がカバーして歌っている。1449kHz ではこの「祖国よ汝の名を残せ」が流れることはこれまでほとんどなかったが、ここにきてこの歌が流れたことに大きなメッセージが込められている。反政府勢力側が首都トリポリの解放を歌で印象づけようとしているのだと感じる。

夜 23 時ごろになってもカッザーフィー側のラジオの周波数は沈黙したままだ。Voice of Free Libya Misratah は「反政府勢力はトリポリの放送局を占拠した。間もなくテレビ、ラジオは真の『自由リビア放送』として電波を出すことになる」と伝えた。これより先、LJBC TV の衛星チャンネルは放送を中断し、黒画面が続いたままとなった。テレビがいつ番組を再開するか、ラジオはどの時点で電波を出してくるか注目した

い。

「自由リビアの声」とアル・ジャジーラは、カッザーフィーの息子のうち、サイフ・ル・イスラームとムハンマドの二人が拘束されたと伝えた。カッザーフィー本人の行方はまだわからないようだが、いよいよ包囲網は狭まってきたということだろう。

【8月23日（火曜日）】

朝7時のモニタリングの時点で、1449kHzのミスラータが定時ニュースの放送を開始したことを知った。これまで（少なくともきのうまでは）この放送は定時ニュースを流すことはなかった。

今朝は7時5分にニュースが放送され、アナウンスでは「今日4回目のニュース」とのこと。ニュースはおよそ30分にわたって放送されたが、その内容はこれまでの反政府系の放送（アル・ベイダやベンガジ）が流す情報とは比べ物にならないくらい洗練されていて、またよくまとめられた質の高い構成だと感じた。アナウンサーはベンガジ、アル・ベイダの担当者に比べてニュースアナウンスに慣れているような印象だ。これが本当にミスラータ発の放送なのかどうか、やはり疑わしいという印象がますます強まった。

番組の中で、キャスターがトリポリの反政府勢力部隊の一人と電話をつないでインタビューをしていた。話の中でアナウンサーが「この放送は中波1449kHzで放送しているが、トリポリでは受信状態はどうか？」という質問をしていた。電話の相手は「トリポリでも受信できている。時々ノイズが入るが」と答えていた。1449kHzがミスラータからの放送であると標榜している中で、トリポリでの受信状態を気にしている様子が伺え、やはりこの放送は首都トリポリへの情報伝達を主たる目的にしているように思える。

一方、今日午前中のNHKニュースを視ていたら、カッザーフィーの息子サイフ・ル・イスラームがテレビカメラの前に現われて、拘束されたという情報を否定したことが伝えられていた。

とはいえ、メディア状況から客観的に見る限り、カッザーフィー体制の終焉は間近に迫っていることだけは確かだろう。LJBCのラジオ、テレビは、確認できる範囲ではすべてダウンしている。LJBCのウェブサイトも同様。大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のサイトについては、依然として「放置」状態が続いている。カッザーフィー派の拠点都市スルトのLJBCのウェブサイトも更新が行われないうまま放置されている。カッザーフィー派は事実上情報発信手段を失ったことになり、情報戦では反政府側に圧倒的に有利な情勢となっている。

【8月24日（水曜日）】

時事通信は今朝「…カダフィ大佐は24日、地元ラジオ局を通じ、首都トリポリの居

住区兼軍事基地バーブ・アジジヤから撤退したことを認め…」という記事を配信している。

今朝7時時点で、カッザーフィー側のラジオ周波数はすべて沈黙したままである。

一方反政府側の「ミスラータの自由リビアの声」は1449kHzが異常に強力な電波を出している。本来の出力（公称500キロワット）での放送が行われているようだ。675kHz、1125kHzも放送を行っているところが確認できている。

1449kHzのミスラータは、今日は12時前からずっとノンストップでコーラン朗誦を流し続けた後、15時43分から20分間Takbirをこれまたノンストップで流し続けた。16時3分にIDが出たあと、今度はドウアー（祈り）を流した。16時12分からは説教、そして16分から宗教番組が続いた。1449kHzは、きのうは現地時間の夜明け前から興奮した雰囲気でもトリポリ解放を祝う内容を放送し続けたが、今日の放送は趣が完全に異なっている。金曜日でもないのに非常に宗教色が強い。その後モーニングショー「おはようリビア」となり、通常編成になった。

LJBCのウェブサイトは閲覧不能、海外向けの大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のウェブサイトは、引き続き「放置」状態のままである。

【8月25日（木曜日）】

カッザーフィーの行方は依然としてわからない状態が続いているようだ。一説にはトリポリをすでに脱出しているとか。海外メディアの情報によると、リビアの地方都市のうち、地中海岸のスルトと、南部の都市で「革命の聖地」と呼ばれるセブハはカッザーフィー派が今なお押さえているとのことだ。

LJBCのラジオ各波は依然として沈黙状態、そして反政府側のラジオ各波は継続中…という構図に変化はないが、これまで放置されていたLJBCの海外向けラジオ放送大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のホームページが一部書き換わった。

今朝10時にチェックしたところ、タイトル画面やカッザーフィーの写真、グリーンブックの紹介などが削除され、古いニュース項目もすべて無くなっている代わりに、ニュースの項目だけが書き換わっている。とにかくカッザーフィー時代の情報を削除することに主眼が置かれたようで、メインページのニュース部分だけが書き換わっている。ページ下のほうの「カッザーフィー語録」といったリンクは残ったままになるなど、急な対応を行っていることがわかる。これまでラジオ国際放送大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のHPはアラビア語のほか、英語、フランス語、スワヒリ語、ハウサ語で記述があったが、現在はそうしたリンクはすべてなくなって、アラビア語のみでの表示となっている。ニュースの項目は「カッザーフィー、トリポリ撤退」「文化人たちの声」など。海外メディアの引用による記事が多いようだ。

一方、テレビ放送は、やはりLJBCのテレビ放送そのものは落ちている様子。上記の大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のHPのニュースによると、先日のカッザーフィー

一の電話演説などは、LJBCの放送を事実上「代行」している別の衛星チャンネルを通して放送されたとのこと。カッザーフィー派が運用しているネットサイトには「リビア・ジャマヒリーヤテレビが放送できない状態にあるため、ニュースや軍の情報はAI-Ra'i TVで放送している。ナイルサット衛星11316MHzを視聴してください」とのお知らせが記載されている。

AI-Ra'iはネットストリーミングで視聴できるが、たびたび配信が途絶える。視聴者からの電話メッセージを放送するほか、対談番組、そしてカッザーフィーの先日の演説の再放送などを流して「ウソ情報を放送する他のメディアを糾弾する」などとのメッセージを繰り返している。AI-Ra'iはダマスカスにスタジオがあると放送の中で話していた。AI-Ra'iという名称のチャンネルはこのチャンネル以外に少なくとも2つ存在していて、HP上でストリーミングが視聴できるが、もちろんまったく別の番組を流している。

きのう時事通信が配信したニュースについて、大ジャマヒリーヤからのアフリカの声のHPに掲載されているニュースを読むと、カッザーフィーの演説は「地元ラジオが放送したものを現地のテレビが放送…」ではなく「電話での演説を中東の衛星テレビ局AI-Ra'iが放送…」だったことがわかった。

海外メディアの流すニュースは結構いい加減だ。時事通信の記事もいろいろな解釈ができるように、ぼやかした記述になっているところがなかなかにくい(笑)ところだが、もともと不正確な海外ニュースを孫引きして描かれたような情報に頼っていると、現地の情勢を読み誤ってしまいかねない。

【8月30日(火曜日)】

朝7時にチェックした結果、1053kHzのトリポリが反政府側の放送を流しているところが確認できた。カッザーフィー時代に比べて音質が悪いものの信号は強め。

1053kHzのIDは"Radio Libya راديو ليبيا"と出ている。リビアの他の反カッザーフィー系のラジオ局のような"Free Libya"という呼称は使っていない。放送がトリポリから出ているということもIDの中ではアナウンスしていない。番組の内容はまだ急造といった感じで、国歌(旧王制時代のもの)と、愛国歌、そして時々西洋ポップス(イージーリスニング系)を繰り返し流しているほかは、お知らせなどが主に放送されている。

今朝7時過ぎには「9月3日にトリポリで金曜集会を開催するので、次の9か所のいずれかに集まってください… 緊急事態に際してテロリスト(註:カッザーフィー派のこと)の攻撃と混乱を避けるために、武器の持ち込みは禁止します…」といったアナウンスが行われていた。集会開催場所の広場や通りの名称の多くが変更になっているらしく、アナウンスの中では旧名称と新名称を併せて告知しているところが、よりリアルな感じで伝わってくる。

その他のリビアの国内放送の中波・短波の周波数については、1449kHz、1125kHz、

675kHz はこれまでどおり反カッザーフィー系の放送が出ていることが確認できるが、カッザーフィー派の番組を流していた 972kHz と 8500kHz、1251kHz では何も確認できていない。1251kHz はこれまで海外向けの「大ジャマヒリーヤからのアフリカの声」をキャリアしていたが、今後この周波数で何が出てくるか注目したい。

海外からのニュースによると、カッザーフィーの家族はどうやらアルジェリアに逃れたようだ。カッザーフィー本人はどこにいるのか。

【10月21日（金曜日）】

今年春から続いたリビア情勢の混迷は、カッザーフィーの拘束・殺害という結末を迎えた。内外の各メディアはこぞって速報。2011年を代表する大ニュースのひとつであることは間違いない。

カッザーフィーは、北中部のスルト（スルト）に隠れていたということだ。カッザーフィー派が最重要拠点としていた都市である。8月までは、スルトのLJBC（国営ラジオ）は独自の番組を放送していた。地方都市の中でも精鋭部隊を配置して鉄壁の守りを展開していたとされている。トリポリが陥落したあと、カッザーフィーの行方については諸説あった。スルトやバニワリードといった町の名前が出ていた。

カッザーフィーの拘束・殺害を受けてリビアの国内放送は特別番組を放送した。1053kHzのRadio Libya（トリポリ）は、聴取者との電話インタビューを延々と放送していた。電話口でリスナーが喜びのコメントを次々に話していた。1053kHzの電波は首都圏をカバーしていることから、ミスラタの聴取者に対しても呼びかけを行っていた。675kHzのベンガジ、1449kHzのアル・アッサもともにカッザーフィーの拘束を喜ぶ人々の声を伝えていた。

国営ラジオの周波数のうち、長らく停波している972kHz（スルト）、1251kHz（トリポリ・海外向け大ジャマヒリーヤからのアフリカの声）は依然止まったままだ。かつて放送が出ていた828kHz（セブハ）や711kHz（ジェフレン）でも何も聞こえていない。

トリポリが陥落して以降、リビアの衛星テレビはAsiasatのチャンネルラインナップからは落ちてしまっているので、新政権側・カッザーフィー側のいずれのテレビチャンネルも、ネットストリーミングで視聴するしかない。新政権側のLibya Al-Hurrahは、おおむねアル・ジャジーラと同じようなトーンで、カッザーフィーの拘束・殺害を伝えている。

一方、カッザーフィー派を支持するテレビ局のうち、シリアから放送しているAl-Ra'iは、カッザーフィーの拘束・殺害のニュースを無視するかのようにパレスチナ関連の歌やビデオを流している。その後、日本時間の深夜以降になってカッザーフィーの殺害がほぼ確実視されるに至り、画面左上に黒い喪章（斜めのライン）が付加された。その後もAl-Ra'iはLJBC時代によく流れていたビデオクリップ（軍事教練の様子や、パレー

ドなどの映像が多い)を流したり、対談番組を放送したりしている。当然のことながらカッザーフィーのことを「殉教者」と呼び始めた。

また、送信場所は不明ながら、LJBCの本流を受け継いでいると思われる Libya TV (どうやらサーバーはトルコにあるようだが)は、このところずっと動画を流せない状態になっているものの、カッザーフィーの拘束・殺害を対談番組の中で伝え、カッザーフィー支持派の視聴者からのメッセージを流している。

日本時間 20 日の 23 時 30 分過ぎにチェックしたところでは、まだこのチャンネルは「NATO のテレビ局 (アル・ジャジーラなどを指す独特の言い方) が我々のリーダーが拘束され、死亡したと伝えているが、現時点では確認されていない」と強気の報道を繰り返していたが、その後、アル・ジャジーラが死亡したカッザーフィー (とされる人物の) の映像を流したあたりから、トーンダウン。キャスターは悔しさをにじませながら、カッザーフィーを追悼するコメントを口にした。

その後、死者を悼むコーランの一節が流れ、LJBC でもよくかかっていた Allah 'Akbar (カッザーフィー政権時代の国歌) が流された。画面には「サイフ・ル・イスラームは新たな指導者に。我々には勝利か死しかない。近く、サイフ・ル・イスラームの演説を放送…」と書かれていた。結局サイフ・ル・イスラームの肉声は現在まで放送されていない。

この Libya TV は、その後カッザーフィーの肉声を短く放送した。これは以前に電話線を経由して録音・放送されたものの一部のようなのだが、その内容は「…私の様子を気にかけてくれている世界の指導者たち、世界の人々に感謝する。私はここにいる…」と比較的静かに語っているもの。このタイミングで流れたカッザーフィーの肉声については、その使い方にいくつかの意味合いがある。ひとつは、カッザーフィー派の残党に指導者 (殉教者) の声を聞かせることで、今後の抵抗の糧とすること。もうひとつは、カッザーフィーの肉声のある種の遺言として放送したということだろう。

リビア情勢は大きな転機を迎え、今後の国づくりの行方に注目が集まっている。イラクやアフガニスタンのような不安定な状況が繰り返されることになるのか、まがりなりにも国としての体裁を作り上げることができるのか。同床異夢の新政権ははなはだ危うい船出を迎えることになる。

【10月25日(火曜日)】

カッザーフィーが拘束・殺害されるという状況を経て、リビア情勢の行方から目が離せない状況は続いているが、放送のほうにも少し動きが出ている。

リビアの中波のうち、しばらく止まっていた 1251kHz が復活している。放送は通常は日本時間 14 時または 14 時 30 分に開始している。アカペラの国歌 (当然のことながら旧王制時代の Ya Biladi という歌である)、コーラン朗誦、音楽とアナウンスといった内容が続き、現段階ではテスト放送の域を出ていないような構成である。1251kHz

は今日（10月25日）コーランの朗読の後、次のようにアナウンスを出した。（原文アラビア語を訳した）

“リビアラジオ・テレビネットワーク。リビア全土の聴取者のみなさん。首都トリポリからお送りしているリビアラジオ・テレビネットワークの「ラジオ・リビア」の番組は次の周波数で聴くことができます。

リビア南部、北西部、周辺の北アフリカ諸国、南欧地域では中波 1251kHz。他の地域については次のFMネットワークの周波数で放送しています。

解放されたリビアの首都トリポリ、およびその郊外では 90.3MHz。

アル・フムスとその郊外では 97.9MHz、

ガルヤーンとその郊外では 95.0MHz、

ズリタンとその郊外では 95.6MHz で。

一方、アフリカ大陸西部各国の聴取者については解放されたリビアの首都トリポリから放送している「ラジオ・リビア」のフランス語による放送を聴くことができます。周波数は 11.600MHz。放送はリビア時間の 6時から8時、つまりグリジッチ標準時 4時から6時です。こちらはリビアラジオ・テレビネットワーク、首都トリポリからのラジオ・リビアです”

アナウンスを聞くとわかるとおり、短波での送信は現在フランス語での 2時間だけ。11600kHzが唯一であることがわかる。日本でも比較的強力で受信できている。

1251kHzについては1053kHzのRadio Libyaとは別番組。1053kHzのほうもRadio LibyaのIDを出しているが、1251kHzのほうは「首都トリポリからのラジオ・リビア」とアナウンスしている。

【11月11日（金曜日）】

1251kHzのRadio Libyaを14時ごろから15時半ごろに定点チェックしているが、日本時間15時に放送されるニュースを除いては毎日同じような編成が続いている。放送はほぼ毎日14時前後にID、アカペラの国歌、コーラン朗唱で開始している。コーランの後はドゥアー（祈りの言葉を唱えるもの）が続き、そのあと15時まで音楽、15時にニュースの要旨が5分ほど放送された後は、また音楽といった内容となっている。

但し日曜日から火曜日（11月6日から8日）までの放送は例外。イスラムの「犠牲祭」だったために宗教色の強い構成で、ドゥアーが延々と続いたあと、アカペラの宗教歌がニュースまで続いた。IDは全然出なかった。周波数アナウンスもなかった。

上述の両日を除いては、このところ14時20分以降15時までの間は、アラブ世界を代表する大歌手Fairuzの楽曲が次々と流れて、聴いているほうとしてはゴキゲンな内容である。今日は15時のニュースの要旨の後、久しぶりに周波数アナウンスが流れていた。10月25日のこのページで紹介したアナウンスと同じもの。中波、FMと短波でのスケジュールに変更はない。

日本時間 1 時から短波 11600kHz で放送されているフランス語放送は、このところかなり良好に受信できている。

この 11600kHz、おそらく日本を含むアジアやアフリカ地域での受信がもっとも良好なのではないかと推測している。というのは、この周波数には同時刻にブルガリアの DRM（デジタル短波）放送が出ていて、北アフリカ地域ではリビアを良好に聴くことができていない。おひぎ元なのに、である。また、知人からの情報によると欧州での受信状態も不良であることが多いようだ。

その昔 17930kHz でリビアの海外向け放送「アラブ世界の声」が日本で安定して受信できた。もともとリビアと日本との短波の伝播状態は良好である上に、ブルガリアの放送が邪魔しているせいで、近くよりも遠隔地でのほうが受信状態がよいという現象が生じている。これも、電波（短波放送）受信の醍醐味である。

【終わりに～その後のリビア】

カッザーフィー後のリビアでは、政権崩壊から 10 年近くにわたって混乱が続いた。

2020 年 10 月になって対立する「国民統一政府」と「リビア国軍」との間で停戦合意が成立。11 月には国連主導のリビア政治対話フォーラムの場で、2021 年 12 月 24 日の「独立記念日」にあわせて大統領選挙と国政選挙を実施することが合意された。

2021 年 3 月には暫定国民統一政府が成立。12 月の大統領選挙にはカッザーフィーの息子で、前体制崩壊後に死刑判決を受けてその後恩赦されたサイフ・ル・イスラームも立候補を予定しているという。

カッザーフィー後のリビア内外では、さまざまな政治的思惑を背景としたラジオ、テレビ局のほか、民間の小規模な FM ラジオ局が数多くサービスを行っている。一部の放送局はインターネット上でも情報発信を行っているが、現状ではそれぞれのメディアの主張や性格を把握することは難しい。さまざまなラジオ、テレビ局を併せて視聴することで、いまリビアで起きていることを俯瞰的に把握することが肝要である。